

八尾・よろず考古通信



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行

令和2年度の主な発掘成果から

令和2年度に市域で実施した埋蔵文化財発掘調査では多くの成果がありました。

市域西部の久宝寺遺跡では、平安時代前期の居住域の存在が明らかになりました。また東部の郡川遺跡では、弥生時代前期～古墳時代前期の居住域や、弥生時代後期～古墳時代前期の墓域を確認しています。さらに中央部の成法寺遺跡や東郷遺跡では、鎌倉時代～室町時代の居住域が見つかりました。

以下では、各遺跡(図1)の発掘調査の成果を紹介いたします。

令和2年度
の主な
発掘調査地点



図1 調査位置図

平安時代前期の井戸を発見！

久宝寺遺跡<第94次調査> (神武町)

久宝寺遺跡は、八尾市の中西部に位置する縄文時代晩期(前5C)～江戸時代(17C)の複合遺跡です。今回の調査は工場建設に伴うもので、調査面積は2,549㎡を測ります(令和2～3年度調査)。調査では、古墳時代初頭～古代にかけての遺構、遺物を確認しました(写真1)。中でも、平安時代前期(9世紀代)に比定される井戸(SE211)(写真2)は、一辺約1.4mを測る大形の方形横板組井戸で、下部には曲物を備え、また内側には隅柱を有しています。内部からは完形の土師器、黒色土器、灰釉陶器杯類が多く出土したほか、中国製磁器(越州窯青磁碗)、石帯(鉈尾)、銭貨(隆平永寶)といった一般の集落からの出土が稀な遺物が出土しました。このことから、本地に貴族または官人の居住域が存在していたことが推測できます。



写真1 調査区全景(西から)



写真2 井戸SE211内遺物出土状況(西から)

目次	◆令和2年度の主な発掘成果から(P1～3)	◆考古学よろずコラム第25回(P4)
	◆イベント情報/編集後記(P4)	

弥生時代前期～古墳時代前期の居住域や墓域などを発見！ 郡川遺跡<第32・33次調査> (郡川一丁目 教興寺一丁目 服部川一丁目)

郡川遺跡は、八尾市の東部に位置する弥生時代前期(BC4)～中世(16C)の複合遺跡です。

第32次調査(令和元～3年度調査)

今回の調査は八尾市郡川土地区画整理に伴うもので、調査面積は4,812㎡を測ります。調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構群を検出しました。北西部に位置する②-1区では、古墳時代前期の平面方形の竪穴住居(写真3)を確認し、周辺の調査区からは、井戸や土坑が見つかり、本地一帯が当該期の居住域であることが判明しました。一方、南部に位置する②-7区、②-9区、②-10区では、当該期の作土層を確認し、生産域として利用されていたことが判りました。また、東部に当たる①-3区では、当該期の「L」字に屈曲する溝が検出され、この溝は、方形周溝墓の周溝の可能性が有ります(写真4)。これらの遺構群は、弥生時代後期～古墳時代前期の集落の構造を復元する上で注目すべき成果と言えます。



写真3 ②-1区竪穴住居 101(北東から)



写真4 ①-3区方形周溝墓 201(上が東)

第33次調査(令和2～3年度調査)

今回の調査は八尾市郡川土地区画整理に伴うもので、調査面積は13,210㎡を測ります。調査では、弥生時代前期～古墳時代前期の遺構群を多数検出しました。この内、弥生時代前期については、③-1-1区で居住域に関連する土坑や溝を数基検出し、遺構群はこの調査区に限られていることから、当該期の居住域は小規模であったと推測されます。一方、弥生時代後期については、各調査区で井戸、土坑、溝を多数検出し、また、③-5E区では、弥生時代後期前半に比定できる竪穴住居が見つかりました。弥生時代後期後半から古墳時代前期については、弥生時代後期後半の方形周溝墓(写真5)を4基、古墳時代前期の方墳を4基検出し、当該期は墓域であることが判りました。この内、全容が判明した方形周溝墓201は、東西12.0m、南北12.6m、また方墳201(写真6)は、東西22.0m、南北23.4mの規模を測ります。本地で検出された墓域は、当地の北に位置する古墳時代後期の前方後円墳である郡川西塚古墳の造営前夜の様相を復元する上で注目すべき成果と言えます。



写真5 弥生時代後期 方形周溝墓 201(上が北)



写真6 ③-1-1E区方墳 201(上が北)

鎌倉～室町時代の居住域を発見！

成法寺遺跡<第 32 次調査> (南本町四丁目)

成法寺遺跡は、八尾市の中央部に位置する弥生時代中期後葉(前1 C)以降の遺跡です。今回の調査は診療所建設に伴うもので、調査面積は 197 m²を測ります。調査では、鎌倉時代後期(13C後)～室町時代前期(14C前)、江戸時代(18C)の井戸、土坑、小穴、溝などの遺構や遺物を確認しました(写真7)。中でも西部で検出した2条の溝(SD101・SD102)は、南北方向に直線に並行して延びる溝で、当該期の集落を区画する溝であった可能性が高いと考えられます。また、調査地中央で検出した井戸(SE103)(写真8)より南部では、室町時代前期の土坑、小穴、溝を確認したことから、本調査地の南部に当該期の居住域が展開した可能性が高いと思われます。江戸時代では、井戸2基(SE101・SE102)以外には遺構はなく、これらの井戸はおそらく耕作に関わるものであったと思われます。



写真7 調査区全景(北から)



写真8 井戸SE103(南から)

室町時代前期(14C前)の居住域を発見！

東郷遺跡<第 86 次調査> (東本町三丁目)

東郷遺跡は、八尾市の北西部に位置する弥生時代中期後葉(前1 C)～室町時代中期(15C)の複合遺跡です。今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査面積は 306 m²を測ります。調査では、鎌倉時代(13C)から室町時代前期(14C前)の居住域に関連した井戸、土坑、溝や遺物が見つかりました(写真9)。井戸は5基が見つかっており、井戸側の種類では、羽釜(写真10)、曲物、石組+曲物があります。溝(SD1)は、その方向や規模からみて、屋敷地を区画する区画溝であったと推定されます。

周辺においては、平安時代後期から室町時代前期(14C前)の居住域に関連した遺構・遺物が多く検出されており、本地を含む一帯には当該期の居住域が存在していることが判りました。



写真9 調査区東部全景(北から)



写真10 井戸(SE1)断割り状況(西から)

河内に持ち込まれた弥生時代後期(1～2世紀)の土器

八尾市を中心とした河内地域では、持ち込まれた土器(以下搬入土器と記す)が多く見つかります。そこで今回は、河内の各遺跡から出土した主な搬入土器を紹介します(図2)。

亀井遺跡からは吉備系の長頸壺や、讃岐系の高杯、郡川遺跡からは阿波系と考えられる甕、八尾南遺跡からは近江系の鉢が見つかりました。また弓削遺跡からは、口縁端部にキザミ(タタキ)を施す淡路の特徴を示すが、その他は河内の要素である甕や、杯の形状と口縁部外面に施す擬凹線は北近畿の特徴を示すが、脚部以下は河内の形状である高杯が出土しました。さらに、瓜生堂遺跡(東大阪市)からは土佐系の甕、段上遺跡(東大阪市)からは東海系の可能性のある合子形土器が出土しています。これらの土器は西日本の各地から持ち込まれており、当該期における各地域との交流を考える上で貴重な資料です。

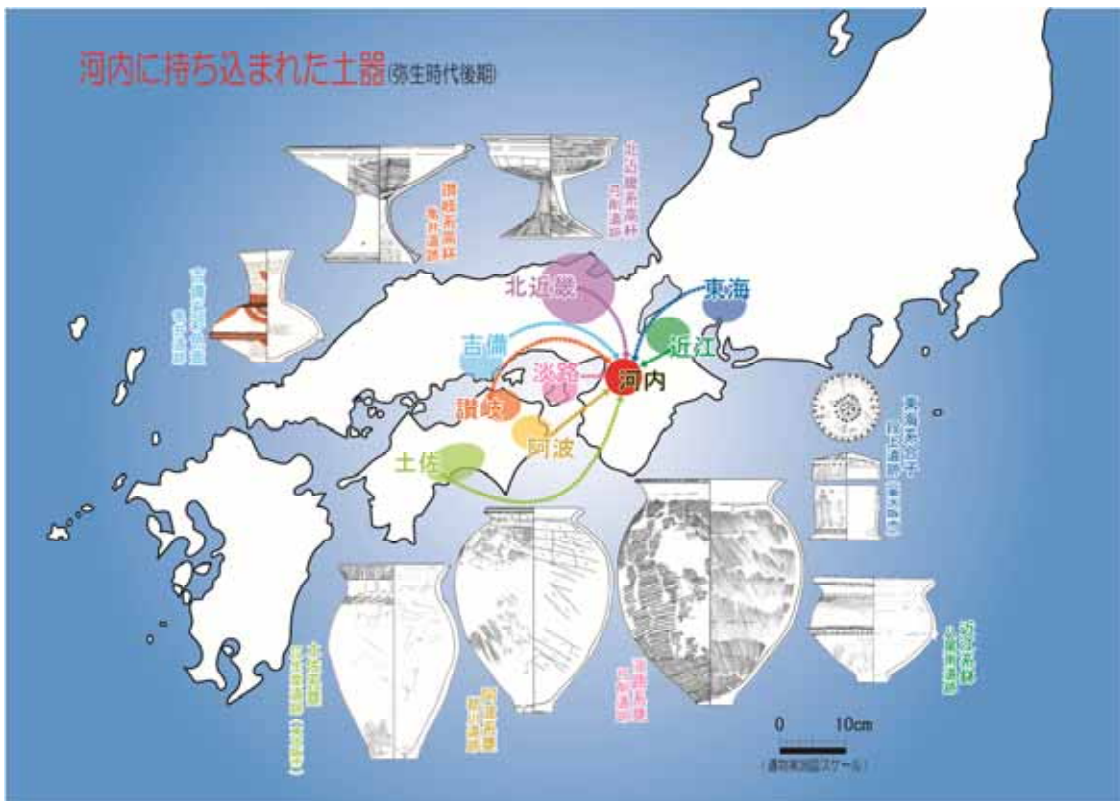


図2 河内に持ち込まれた弥生時代後期の土器分布図

編集後記

恐ろしい流行り病(新型コロナウイルスの感染)が世界中に蔓延してから2年近くが経過します。

この間、治療薬の開発やワクチンの接種がかなり進み、感染は抑えられつつある今日この頃です。引き続き感染を防止する対策には徹底し努めて参りたいと思います。

人類は、過去このような流行り病に悩まされ、立ち向かい、乗り越えてきました。

巷では、「コロナ禍」、「with コロナ」と言う言葉を耳にしますが、これらの言葉が聞こえなくなる世の中になって欲しいですね。

〈KN〉

イベント情報

秋季企画展「やおの古墳時代(初頭～前期) - 3～4世紀の墓制 - 」
 内容：八尾地域の古墳時代初頭～前期の墓から出土した遺物を中心に展示
 期間：令和3年9月29日(水)～令和4年2月18日(金)
 時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)
 休館日：土・日・祝日・12月29日～1月3日
 但し10月24日(日)、11月13日(土)・14日(日)、
 令和4年1月23日(日)は休日開館



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌
『八尾・よろず考古通信 25号』

発行：2021年10月31日

八尾市立埋蔵文化財調査センター指定管理者
 公益財団法人八尾市文化財調査研究会
 〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2
 TEL・FAX 072-994-4700
 E-mail : maibun_zyao@white.plala.or.jp

